

碧玉笛

The Flute of Seven Stops by Dion Fortune

厳しい顔に深いしわを刻んだ大柄な男がユーストン駅のプラットホームを歩いていった。イングラント北部へ向かう臨港列車が長旅に備えてたたずんでいる。発車までわずか一分しかなく、男は最後尾の客車にあわてて乗り込み、一番手前のコンパートメントのドアを開けて中に入った。旅なれた人ならばまず避ける場所といえる。しかし男は平気だった。たまたま乗り合わせる他人から「袖振り合うも」とばかりに交流を無理強いされるくらいなら、最後尾特有のひどい振動を我慢するほうがずっとましだった。人付き合いよりも読書や蓄音機を好む孤独な男だったからだ。

コンパートメントの片隅に腰を落ち着けようとした途端、汽笛が鳴り響き、巨大な臨港列車が北部への長旅を開始すべくゆっくりと駆動しはじめた。強力な二連機関車に牽引され、徐々に速度を増し、プラットホームの端に至る頃には運行速度に達しつつあった。そのときなにか激しい音がして、人がひとり、列車最後尾の鉄柱に飛びつくや、乱暴に扉をあけて客車に転がり込んだ。すぐに立ち上がって扉を閉めようとしたのだが、ふたりめの人間が隙間から体をねじ込んでいた。ひとりめの男はそいつに飛びかかり、満身の力をこめて顔面にパンチを打ち込んだ。殴られた男はそのまま線路上に転落していった。客車に最初からいた乗客―孤独を好む男―には一瞬、転落している男の幅のある体軀と黄色いモンゴル系の顔が見えた。が、それはすぐに消えてしまった。

飛び込み乗車を成功させた男は後ろ手でドアを閉めると、なかば気絶したような体でシートに座り込んだ。その

まま床に転がってしまいそうだったが、孤独な男があわてて手助けし、どうにか安全な姿勢で座らせることができた。一仕事済んだので、男は非常連絡用のコードを引っ張って事故発生を係員に知らせようとした。走行中の列車から転落して無事にいる人間などいるはずもないからだ。だが紐を引っ張るとしたとき、腕を押さえられた。

「お願いですからお待ちいただきたい。そのコードをお引きになると、きわめて厄介なことを巻き込まれます。ご自身のためにもお控えください」

ジョン・オーステンは手を中空にかかげたまま動きをとめた。「いや、しかし、あの人はまちがいなく怪我をしていますよ。ほっておくと次の列車に轢かれるかもしれないし」

「そのほうが世のため人のためでしょう。蛇蝎よりも悪辣な手合いです」

「なんであれ人が死ぬのを見過ぎすのは良心が痛みますよ」

「そのコードを引いてもやはり人が死にます。あれが生きていれば必ずわたしを殺してくるのですから。ごらんください。すでにあれは試みておるのですよ」　　そういうと男は手をチョッキのなかにさし入れた。チョッキから出てきたとき、手のひらにはべったり血糊がついていた。

ジョン・オーステンは心が決まらぬまま動作を中断していた。一瞬だけ見えた顔つきは、たしかにいま聞いた言葉を裏付けるものだった。あれは人知を備えた獣の顔だった。そして眼前に座り込む男は学者の風貌と洗練された教養人の手を持っている。オーステンはためらい、どうしてよいかわからなくなった。いずれにせよあの男は駅を出てすぐというあたりで転落したのだから、すでにもう収容されていてもおかしくはない。それに、どうみても裏のありそうな話に進んでかわるのはいかなるものか。

シート上の男はしばらく横になっていた。それから向き直ると、オーステンの顔を真っ向から覗き込んで話しはじめた。

「あれが落ちていくとき、顔を見ましたか？」

オーステンはうなづいた。

「自分の命がもうないと思います。なのに一人娘があいつやその仲間につかまろうとしているとしたら、どうしますか？」

オーステンはきよとんとした。しかし口を開こうとしたとき、食堂車の係員がコンパートメントを覗き込み、最初の昼食時刻ですのでおいでくださいと声をかけてきた。妙な会話をやめるよいチャンスとばかりに立ち上がったが、目の前の人物が出血していたことを思い出した。重傷かもしれないのだ。

「大丈夫ですか？」とオーステン。「怪我をしてらっしゃるでしょう」

「いや、まったく平気です。ほっておいていただくのが一番の薬ですから」。そう言うときクッションに頭を沈め、目を閉じた。

オーステンはしぶしぶその場を離れた。しかし食事中もずっと一連の不思議な出来事のことを考えていた。自分が目にしたものはいかなるドラマの一部だったのか。

食事が終わり、揺れる列車のなかをどうにかコンパートメントまで戻ると、だれもいなかった。正直ほっとしてもいた。シートに座ろうとしたとき、網棚にあげておいた手提げ鞆が床の隅に置いてあることに気がついた。重要な書類が入っていたのだが、鍵はかけていなかった。オーステンは自分の不注意に舌打ちしつつ、中身が荒らされていないか確かめようとした。小さな包みが目にとまった。破いてみると、かれの手のなかに笛があった。およそ十インチほどの長さで、薄緑色の碧玉製で、奇妙な彫刻が施されていた。東洋の細工らしく、ヨーロッパの八音階を奏でる笛ではなかった。音栓が七つしかないのだ。笛のまわりには紙幣の束が巻きつけてあり、それを手紙が包みこむという形になっていた。

それは前置きなしで始まった。

「これからお願いすることの重大さを思いますと、本当に申し訳ないとしかしいようがありません。自分のことであればここまではいたしません、子供たちのこととなればいぶんなこともあえて行いましょう。この列車が連絡する客船にわたしの娘アヴリル・アリンソンが乗船しております。同封のお金を娘にお渡しいただき、わたしの身に起きたことを伝えてください。なにとぞ、なにとぞ娘が親類のもとに行き着くまでお守りいただくようお願い申し上げます。あれは大変な危険にさらされております。また笛につきましては、細心の注意を払って保管してください。おそらく盗もうとする者が現れるでしょうから。そして沖合いに出て、もはや岸に打ち上げられる可能性なしと判断されたなら、笛を海に投げこんでください。万物を統べる不可視の力があなたを守りますように、それ以上に危急のときにある娘をあなたがお守りくださるよう伏してお願ひ申し上げます。

わたしは下腹部を刺されておりまして、内出血で死に瀕しております。もう助かりません。自分は医師ですので、自己診断にも自信を持っております。もはやこの身に残されたことは生きる者たちの益を図るのみであり、それを鑑み、死を待つよりはむしろ死に向かうほうが最善と心得ました。ゆえに列車から身投げしようと思いません。この件を通報なされば、あなたの身柄はイングランドに留め置かれて取り調べを受けざるを得ないと思われまふ。それではわたしの意図はまったく生かされませんし、あなたの助けをもっとも必要としているひとりの人間もお助けいただけないという仕儀に至ってしまいます。

心より感謝いたします。かならずやお助けいただけるお人柄とお見受けいたしましたゆえ。

チャールズ・アリンソン 拝

オーステンは読み進めながらうなり声を発した。これは狂人の手紙ではないか。当人が客車にいない以上、自殺を実行してしまったのかもしれない。あるいはどんな騒ぎを起こしても世間の注目を集めたいという狂人で、実は別のコンパートメントに潜んでいるとか。列車をしらみつぶしに搜索するには車掌の協力が不可欠だが、そうなればオーステンも無関係というわけにはいかなくなる。どう転んでもきわめて望ましからざる状況といえた。あの男性が運行速度の列車から投身したとすれば、もはやかれを救う手立てがないことは確実である。投身してないのであれば、一応は大丈夫ということになる。オーステンは腹をくくり、とりあえず金を娘に渡すことにした。娘自体が幻覚の産物でないとすれば、の話である。碧玉の笛も娘に渡すことにした。向こうが好きに処分すればよいのである。女性が個人的な警護を必要としている場合でも、客船の係員に頼めばよい話である。こう決心すると、オーステンは座席にどつかと腰をおろした。そして列車が埠頭に到着するのを待つのみとなったが、内心の焦燥感と不安は認めざるを得なかった。

列車が陰気な埠頭の駅に到着するや、例によって乗務員たちの往来が激しくなった。ほどなくジョン・オーステンは客船の甲板に向かう鉄柵階段をゆつくりと上っていた。階段を上りきったところに若い娘が立っていて、やってくる人々の顔を熱心に覗き込んでいた。年頃は二十歳になるかならないか、ほっそりとした体を分厚いブラウンの毛皮で包んでいる。頭にはびったりしたファーキャップをかぶり、サイドから垂れ下がる赤金の巻き毛がセーブルをバックに輝いていた。およそ女に縁のない人生を送ってきたオーステンだったから、本来ならちらりと眺めるだけで鑑賞終了となるところだが、視界の隅に不吉なものを認めてしまった。ユーストン駅近辺で列車から突き落とされたものと同種類の、あの四角いモンゴル系の顔が甲板出入り口の扉の陰から覗いており、ブラウンの毛皮のコートの女性を注視していたのだ。

オーステンは奥歯をかみしめた。作り話ではないという確証を得てしまったのだ。確かに手紙を残した男性はあ

れくらの年の娘がいておかしくない年配だった。そしてラトヴィア人かフィンランド人か知らないが、とにかく女性には近づけたくないタイプの男が物陰に潜んでいる。とはいえ父親もまた物陰に潜んでいて、ひよいと顔を出す可能性もある。オーステンは真に必要なに迫られないかぎりこの件にかかわるつもりはなかったから、かれもまた物陰に身をひそめ、フィンランド人と娘を観察することにした。

ロンドンからやってきた乗客の波がおさまると、娘はあせるように鉄柵から身を乗り出して埠頭を眺めていた。そこに「総員離岸準備」を知らせる総舵手のラツバが鳴り響き、甲板員たちもやいを解きはじめた。娘は降り降り口担当オフィサーのもとに行き、その腕におずおずと触れた。オーステンは娘の言葉を聞き逃したが、男性の低い声は聞こえた。

「申し訳ありませんがそれはできません。満潮時に湾口の砂州を越えなければなりませんので」

娘は絶望と恐怖の面持ちで振り返った。オーステンは心を硬く閉ざした部分はあるものの、根はやさしい人間である。かれはすばやく娘に近づいた。

「失礼ですが、ミス・アリンソンですね？」

娘はえつとばかりに振り向いた。

「こちらへ」とオーステン。「お話したいことがあります。お父上から言伝を頼まれておりまして、そう言いつつ娘をラウンジへ連れていった。乗客でごった返す船室内ではふたりに注意を払う人などいない。衝立で仕切られた一角に落ち着くと、娘は男をしげしげと眺め、男はどうやって悪い知らせを切り出そうかと逡巡しつつ絨毯に視線を落としていた。もはや話の真偽を疑う余地も残っていなかった。

最終的にポケットをまさぐることにした。

「これを読んでください。わたしが説明するよりも、そのほうがいいと思いますから。悪いニュースなので心苦

しいです」。そう言う父親の手紙を娘に差し出した。

娘はなにも言わず、おだやかに手紙を受け取った。こうなることが以前から危惧されていて、なってしまった以上は覚悟をもって対処しようという、抑制された態度のようだった。どう慰めるべきか、なんと言葉をかければよいかわからないまま、オーステンはふたたび視線を絨毯に落とした。

沈黙を破ったのは娘のほうだった。

「七つの音栓のある笛―碧玉の笛です。いまどこにありますか？」

「わたしの書類鞆のなかですが」

「その書類鞆は？」

「わたしのキャビンに」

娘は不安げに胸元を押さえた。

「それでは危険です」と娘。

「すぐ行って確かめましょう」と男はあわただしく立ち上がった。

自室に向かうべく、白ペンキで塗られてぎらつくほどに照明された長い通路に入ると、幅のある四角い人物の姿が向こうの端のコーナーに消えていくのが見えた。オーステンは早足でキャビンに入ったが、そこには大きく口をあけた書類鞆が転がっていた。碧玉の笛は消えていた。

オーステンとしては狼狽しつつミス・アリンソンに失敗を報告するしかなかった。

「弁償させていただけませんか」とかれは言った。「わたしの不注意でなくしたも同じです。甘くみていました」娘は首を横に振った。「値打ちの問題ではありません。父が望んでいたように、あれは海の底に沈めたほうがいいんです。ただ、あれは普通の笛ではなくて」。娘は不安げに男を見上げた。「あの―事物の秘められた側面のこ

ととか、そういった方面をご存知でらっしゃいますか？」

「なんのことかさっぱりわかりませんが」とオーステンがこわばった表情で答えた。内緒話を打ち明けられるのはごめんこうむりたかった。ここは母親タイプの客室乗務員おばさんに任せたいと思っていた。自分のような堅物を相手にせず、母性系の胸にすがってしくしく泣くというのが通常の手順であろう。「よろしければ客室まで一緒に緒して、世話係の乗務員を見つけてさしあげましょうか。たいへんなご心痛でしょう。わざわざ説明なさらずとも」

娘は大きな灰色の瞳を男に向けた。「お聞きください」と彼女。「催眠術をずっとかけられてきた人間は、簡単にトランス状態に入ってしまう。私はあの笛の音で催眠状態に入ることに慣れていきます。あれを聞くと、あつという間に催眠状態に入ってしまう、自分に対する支配力を失います。あの笛を吹く人にただ従うだけとなってしまう。それで、あの笛を欲しがっている人たちがいて、その人たちは私も欲しがっています。理由はお話してもむだです。まず理解していただけないと思います。とにかくあの人たちにかまらぬなら、私は身投げしたほうがずっとましなのです。でも、もうこれ以上のご迷惑はおかけいたしません。すでに十分ご迷惑でしたでしょう。申し訳ございません。それではこれにて」。そう言うと、止める間もなく娘は去っていった。

その晩、娘はサルーンには姿を見せなかった。オーステンは自分の不親切ぶりを思い返し、自責の念にかられた。今回の件はなんとも気に入らないのだが、あの娘が孤立無援の状況に至ったのは自分の責任だとも思っていた。オーステンはかつて女性関係で手ひどい目に遭ったことがあり、以来ほとんどその方面とは没交渉である。いまや四十男となり、孤独にもなれ、運命の女神に望むことといえ、邪魔しないでくれという一事だけとなっていた。いわば半分死んでいるに等しい状態だが、死んでいる部分は痛みをもたらないのである。

翌朝早めに甲板に出てみると、ブラウンの毛皮帽子に包まれた赤金の巻き毛が視界に入った。水平の朝日を逆光にして輝いていた。オーステンは早足で巻き毛の持ち主に近づいた。生来シャイで控えめな人間だったのだが、今

回ばかりは自己嫌悪も手伝い、自分でも驚くほどのぶつきらぼうさで本題を切り出していった。

「昨晚はろくにお役に立てず、まことにすみませんでした、ミス・アリンソン。わたしに出来ることがあればなんでもおっしゃってください」

「ありがとうございます」と娘は静かに答えた。「でも私はご迷惑をおかけしたくありません。お願いするとなれば、できればあの笛を取り返していただければと思います。あれがちゃんと破壊されたとわかれば、ずっと心が安らぐでしょう」

「あの笛を失くしたのはなんとも心苦しく思っています。ですがミス・アリンソン、ここはしっかりとしなくてはなりませんよ。あれこれ想像して気に病むのはやめなくては」

「想像の産物ではないんです」と娘が答えた。「催眠術に関して少しでもご存知なら、私の言葉が真実であるとわかりになるでしょうに」

「しかしどうやってあなたを術にかけるというんですか？ ハメルンの笛吹き時代じゃありませんよ。船の上じゃ誘拐もできない。とじこめておく場所すらないでしょう」

「三分もあればあの人たちはわたしをいのように操れます。そうなってしまうと」 娘は両手を広げてお手上げというジェスチュアを示した。へたな台詞よりも雄弁なものといえた。

「いいですか、ミス・アリンソン。なにをそんなに怖がっておいでなのか。正直におっしゃっていただけたら、わたしも少しはお役に立てるかもしれませんよ」

娘は素早く詮索するような視線を飛ばした。

「ご理解いただけないと思います」

「説明してもらえばわかると思いますけどね。ともあれ話してください。余計な口出しはしないと約束します」

娘はしばし逡巡したのち、切り出した。「催眠術のことをなにかご存知ですか？」

「いや、ほとんど知りません。だれでも知ってるような、ひととおりの不正確な知識だけです。昔は催眠術師といえばすごい能力を持っているとされてましたが、今じゃ底は知れてしまったでしょう」

「完全に底が知れたわけでありません。以前信じられていたような、ひと睨みするだけで人をトランス状態にできる催眠術などはいません。でも催眠術にかけられることに慣れてしまった人間は、簡単に影響下に入っています。輝く鏡や光を使って催眠術にかけているような場合、路上やそういつたところでも、同じような光を目にしてしまうと、自発的にトランス状態に陥ってしまいがちになります。

「父は医師でした。それで催眠術方面でも多くの実験を行っていました。ヨーロッパで父以上に催眠術に詳しい人間はいなかったと思います。私は父の実験を手伝っていました。ある日、父の学生時代からの知り合いというウイーンの博士がうちにいらして、父となにやら長時間話し込んでいました。そしてあなたもご覧になった、あの奇妙な碧玉製の笛をくれたのです。ところで、父や医学と心理学以外にも研究テーマを持っていました。父はオカルティズムの研究も行っていたのです。あのウイーンの博士もそうだったと思います。いずれにせよ、問題の笛はただの笛ではありませんでした。それは東方からもたらされたもので、水の精霊を召喚するために使われていました。水の背後にいる元素の力、といったほうがよろしいでしょうか。それは生命を持つ独自の存在なのですけれど、私たち人間とは異なる進化形式に属しています。

「で、とにかく水の力と共感関係にある人間、たとえば十二宮のなかの水の宮に生まれた人間を見つけて、ほんの数秒でいいからその人を完璧な受動的状態にできれば、喚起作業のチャンネルに使えると、そういう話になりました。水の背後にある元素の力がその人を通じて次元移動を行うというのです。父はその力を欲していました。医療に使えると考えていたからです。水の力は浄化であり、癒しであり、慰めの力なのです。ところで私は七月一日

の生まれでした。太陽は巨蟹宮といつかかに座の真ん中にありました。かに座は水の宮のなかでもっとも積極的なので、父は私に実験を手伝ってくれないかと言ってきました。わたしが同意しますと、父はあの笛の音にあわせてトランス状態に入るよう私を訓練しました。わたしは物覚えがよかつたらしく、すぐに夢遊状態に入れるようになってしまいました。

「それからトラブルが起きたのです。別の外国人が父に面会を求めてきました。南ロシアの韃靼人なのですが、その男が笛をめぐって取引を持ちかけてきました。精霊を呼ぶ実験に立ち合わせてくれたらいくらでも払うというのです。しかし父はうんと言いませんでした。なにがあるうと実験に参加させないときっぱり断りました。するとその男は脅迫してきました。きれいな手段で手に入らないのなら、汚い手を使うだけだと言いつつ放ったのです。そして私たちは男が本気だとすぐに知ることとなりました。また、その男には手を貸す仲間がたくさんいるようでした。なにか組織でも作っているらしく、ひとりを追いつつもすぐに次が現れるのです。だから私たちはアメリカに渡ろうとしました。ヨーロッパから引き払うことで、連中を巻こうと思ったのですが、うまくいきません。結果はご存知のとおりです。あの連中は私をつかまえ、笛も手に入れようと思いました。笛はもう向こうの手の内にありますから、次は…」

「あなたには指一本触れさせはしませんよ」とオーステンが言った。「力のおよぶ限りがんばってみます。わたしは精霊とか十二宮とかまったくわかりませんが、あのつぶれた鼻の連中がひとりならずよろちよろしているのはわかっています。あなたに妙な真似をさせないようしっかり見張りますから」

ちようどそこへ操舵手が顔を出した。「お客様、船長が面会を申し出ております」

オーステンが案内されて海図室に入ると、船長、パーサー、船医が勢ぞろいしてこれから恒例の船内点検にとりかかるうとしていた。

「船室から盗まれた骨董品の件ですが」と船長、「通路で見かけたとおっしゃる男を特定できますか？」

「できると思いますよ」とオーステンが答えた。「背が低いわりに厚みのある図体をしていて、色黒で、顔つきはほとんど中国人のようでした」

「その人相風体にあてはまる連中が船底のほうにかなりの人数おるのですよ」と船長。「本船は鉄道建設に従事するリトアニア人を山ほど積み込んでおりますな。鉄道会社から契約を請け負ったボスが自分を束ねているといましようか、ていのいい奴隷貿易みたいなものです。下っ端の連中は無知なあまり、どれだけ搾取されているのかわからんでしょう。まあ、それはいいとして、わたしたちと一緒に船を見てまわっていただけませんか。それであやしい男を見つけていただければ、こちらで身柄を押さえて所持品検査をしましょう。ただどうですか、あの連中はみな、似たような顔をしておりますから難しいのではないのでしょうか。ともあれこの航海士用のオーバーと帽子をご着用ください。なにも見つからない場合、あなたが不必要に目立つのを防げるでしょう」

オーステンは素早く金筋入りのコートと帽子を身につけて三等客室区画へ向かった。下部甲板で移民たちが点検に備えて長い列を作っていた。船長が言っていたとおり、百五十名のリトアニア人はみな同じような顔をしていた。頬骨は高く、鼻は平たく、体型はずんぐりむっくりしていて、いろんな民族が放浪したためアリアの地に入り込んでしまったモンゴロイドの血統を顕著に示していた。背が低い分厚い体躯の浅黒い男をさがそうとしても、それに当てはまる男が百五十人いるというのではお手上げだった。

しかし船長のうしろにくつついて見てまわるうちにオーステンの注意をひくものがあった。肉体労働者の手をしていない男たちが混じっているのだ。数えたところ全部で七人だったが、それを船長に報告しようとは思わなかった。窃盗の証拠としては無意味なのだ。爪が割れていないからといって犯罪者扱いすることはできない。またオーステンとしては、できるかぎり詳しい話は避けたいという事情もある。不運な同伴客の願いを聞き入れ、秘密を守

ると誓ったために、ややこしい事態になったことをいやます痛感させられていた。

オーステンは力のかぎり娘を護ると決意した。日中は簡単なのである。甲板であれラウンジであれ、娘が赴くところ同行すればよい。これが船内の噂にならないわけもなく、オーステンは可愛い同伴者のそばを無愛想に歩きながら、周囲から寄せられる視線の意味を悟って怒り心頭だった。しかし手のうちようもなかった。これまでかたくなに人生から女性を締め出してきた自分が、愚にもつかぬゴシップの的になるなど我慢ができなかった。自分が置かれた立場を悟って憤慨しているという男は、ガード対象となる娘にとって愉快な同行者になるはずもない。いやいや警護役を引き受けているのだと悟るのに大して時間もかからない。この状況を好ましく思う女性は皆無といってよいわけで、たちまち二人の間に冷たいものが流れはじめた。正直にいえばどちらも相手の顔など見たくないのだが、深刻な状況ゆえにいやいや一緒にいるしかない。ならばせいぜい仲良くしましょうという暗黙の了解が取り交わされたといってもよい。娘はデッキチェアに腰掛け無言でセーターを編む。男はパイプをくわえて水平線をじっと眺める。両者にとつて楽しい時間とはいえなかった。

しかし夜間となるとオーステンも警護任務にあたるわけにはいかず、毎朝不安を抱えてサルーンで娘の到来を待つしかなかった。予定では五日の船旅となっていて、すでに四日は平穩に過ぎていた。翌朝には入港、午後の上陸という算段となっている。

四日目の夜、オーステンは警護対象を船室に送り届けたあと、いつものようにラウンジでパイプをくわえて読書していた。甲板に通ずる扉は開いていた。その日は曇って生暖かく、船腹を洗う波の音が一定のリズムを刻んでいた。すでに夜は更けており、喫煙室で行われるブリッジ・パーティーを除けば、乗客たちはみな就寝していた。

ほどなく、ざぶんざぶんという波の音に別の音が混じりはじめた。それは水音だった。しかし大海原の低音ではなく、岩の上をほとばしる溪流のせせらぎのような、震える高音だった。微かなそのトリルは読書をする男の意識

に捕捉されるようなものではなかったが、そのとき足音が聞こえた。顔をあげるとアヴリル・アリンソンが甲板へ通ずるドアをくぐって消えていく姿が目に入った。星空の闇のなかに消える一瞬を見ただけだったが、いつもの歩き方ではなかった。すでに見慣れてしまった跳ねるようなステップではなく、バランスをとりつつ滑るような夢遊病者のそれだった。すぐさまオーステンはあとを追った。カンバスの風除け衝立のところにあのずんぐりしたモングル人が身を隠そうとしているのが見えた。碧玉の笛を唇にあてていた。その誘うような笛の音に向かってほっそりした娘が歩いていく。

オーステンは突進して衝立をまわりこみ、モングル人の喉をつかんで腹部に膝蹴りを叩き込んだ。男が崩れ落ちたので、襟首をつかんで三等客室区画に通ずる急勾配の階段へ放り込んだ。それから船橋からなにか聞こえてこなか耳を澄ませた。いましがたの立ち回りが目撃されて、悲鳴や警報が発せられたのはと不安になったのだ。当直オフィサーの足音がずっと向こうの甲板から聞こえて、やがてそれが消えてしまったので一安心できた。しかし別の足音がゆつくりと近づいてきたのでどきどきとした。アヴリル・アリンソンが衝立のかどから姿を現したのだ。大きく見開かれながら何も見ていない瞳と大きく伸ばされた両腕がすべてを語っていた。彼女は深いトランス状態に入っていた。

しばらくのあいだ次の行動を決めかねていたようだったが、オーステンが握り締めている笛からなんらかの力を感じ取ったのか、娘はゆつくりと接近してきた。盲人が暖炉の暖かさを感じ取ったかのような動きだった。オーステンは手を前に出して娘を制しようとした。その手に娘の手が触れた。指と指がからみあい、男の手はがっしりと捕らえられた。娘の腕は鋼鉄のように強靱だった。二人のあいだを海の風が吹きぬけ、娘がまっていた薄物をはためかせた。娘は爪先立ちのまま、静止していた。それはいまから崩れ落ちて碎ける半透明の波頭を思わせた。娘を支える男は波を受けとめる岩礁であった。そのままの姿勢で数秒が経過した。動きをとめた娘の手が男の手を握

つていて、男の空いたほうの手は碧玉の笛を握り締めていた。

すると奇妙なことがおきた。絶え間なく吹いていた強風が笛の吹き口から入り込み、音栓が呼吸を得た。不思議な和音と低音が船上のさまざまな音と交じり合った。その音色はこの物質次元のものではなく、それを聴く者には原初の自然が迫りくるように思われた。船首が砕いた波が飛沫となって二人のまわりに降り注いだ。あたかもなにか忘れられた信仰の洗礼のようだった。男は眼前に幻覚が生じつつあることに気がついた。波頭からおぼろげな姿が立ち上り、甲板上に流れこんでくる。さまざまな海の声がかれの周囲にあり、大地と人間ははるか彼方のものとなった。それから振動がはじまった。まるで巨大なパイプオルガンの音栓がハム音を発しているかのようで、それが力を得るにつれ、男の手を握る手も同期振動を開始したように感じられた。娘の全身が風にはためく衣のようにハミングしていた。すると振動そのものが男にも伝わってきた。指先にくすぐったいような感覚が生じ、腕、肩とつたわって背骨をくだる。心臓の鼓動も同期するようになった。やがてそれは消えていった。開始したときと同じような終わり方だった。娘の手から鼓動がなくなる。男の腕から振動が消える。頭もはつきりとしてきた。男はだれもない静かな甲板にたたずんでいて、横には力なく腕にすがる娘がいた。

娘の瞳には突然深い眠りから目覚めたための驚愕と空白感があつた。言葉を発さぬまま、なにがあつたのと訴えかけるまなざしに答えるべく、男は口を開いた。「すべて終わったよ、笛は取り戻した」

娘は男の手の中にある奇妙な緑色の物体を不思議そうに眺めていた。やがて理解力が機能しはじめたようだった。「ええ、聞こえたわ」と娘。「船室にいたら、あれが聞こえた。でも、どうやってあたしはここに？」

「きみはこいつを吹いていた男についていった。まるでハメルンの笛吹きだった。あんな不思議なものを見たのは生まれて初めてだ」

「吹いていたのは、だれ？」と娘が息をのむようにたずねた。

「三等客室にたむろしてゐるクズどものひとりだ。もといた場所にけり落としてやったよ。もう二度とめんどろは起こさないだろう。どのみち明日には下船するわけだし」

「なにか、その、起きたかしら？・・・」 なにかしら緊張と懸念が娘の口を重くしているように思われた。そして確かなになにか起きたと意識はしているものの、その本質も意味もまったくわからない男としては、どう答えたものか当惑していた。

「実際になにかが起きたとは言いにくいな。はっきりこれこれということはできない、というか言葉にならない。現象というよりは感覚か。夢を見たというのが一番近いと思う」

「そのとき、なにか感じた？」

「なにかくすぐつたいような感覚だけだった。だが、あれはきみから伝わってきたと思う。きみはまるでベルのように振動していた」

「あたしは―あたしは、あなたに触った？」

「まあその、言おうと思つていたんだが、まるで万力のようにぼくを握り締めていた」

「それで振動は？」

「きみの腕からぼくの腕に伝わってきて、空に消えていったような」

娘は男を凝視した。恐怖でこわばった表情だった。

「どうした？」とオオーステンが訊ねた。「よくわからないが」

「わからないでしょうね」と娘が答えた。「でも、すぐにわかるわ」。そう言うと止める間もなく衝立の向こうに消えていった。

男は船室に戻ったが、簡単には眠れなかった。先ほど経験した振動がまだ体のなかで残響しているような感じだった。生命を持つ感覚が鼓動してかれを満たしていた。活力が密度を増し、すべての存在を明るく彩ってみせる。通常の存在が灰色のブレだとすれば、いまのかれの目に映るものはすべて劇場の一場面であった。そして長年、生命と自分のあいだに垣根を設けていたというのに、生命が満ち潮のように流れ込んでくる。長時間座ったままで仕事をすることに慣れてしまった四十歳の都会人のかれが、少年のように運動したくてたまらない。目を閉じると波頭のうえにいた踊り跳ねる者たちの姿が浮かびあがる。あの者たちと一緒に飛び跳ねて競争したい。波の間を上になに転げまわりたいか。

目を覚ますと明け方だった。夜明けの太陽の水平光が船室に差し込んでいた。夜明けに目覚めたのも久しぶりだった。たいていの都会人と同様、かれも夜型であり、夜遅く寝て、重い頭で朝に目覚めるのが常だった。しかし、そこに夜明けがあり、夜明けの風がかれを呼んでいた。むつくりと起き上がり、服を羽織るや、数分で甲板に出た。船尾右方向に太陽が昇りつつあり、船の周囲ではカモメが滑空しながら鋭い鳴き声をあげていた。すべての波頭が黄金に輝いており、すべての波間は素晴らしく美しい深海の藍色だった。陸地は見えないが、カモメがいるからにはそう遠くはない。オーステンは甲板にたち、きらめく大気を胸いっぱい吸い込んだ。風と海が鼓動しているかのようだった。揺れる船は歩行する生物を思わせる。かれは甲板を散歩していた。船の揺れに動きを合わせてらくらく歩いていけた。運動することの喜びを純粹に味わえたのは生まれてはじめてだった。おおまたのストライドが波のリズムに近づくように思われた。それで甲板上をただ歩き続け、朝食を知らせるラツパが鳴るまでに何マイル歩いただろうか。

かれはドアを見つめ、アヴリル・アリンソンが入ってくるのを待っていた。心配していたが、船室に送り届けた

あとに感じていたいつもの不安ではなく、なにか自分にとって大切なものがない喪失感を感じていた。しかし彼女は現れなかった。おかげで不安なまま朝食を終えたのち、ふたたび甲板に出してしまった。かれのなかの躍動感が室内にとどまることを許さなかったのだ。

それでもアヴリルは姿を見せなかった。すでにアメリカの領海内に入っており、霞んだ新大陸の沿岸が徐々に形をなしつつあった。昼食後に上陸となるはずだが、それでもアヴリルは現れない。かれのなかにわきあがった新たな活力はすべてアヴリルに集中していた。彼女の前では活力がワインとなつて血管を流れていた。彼女がいないと、せつかくの活力も体を引き裂くような拷問であり、火傷に等しかった。

昼食のときもアヴリルは現れず、かわりにかれのまえにはメモが置いてあった。

「オーステン様

私のためにご尽力いただきましてお礼の申しようもございません。しかしかに無作法と思われましても、このさき二度とふたたび顔を合わせないことがお互いのため、しいては私よりの最高の感謝のかたちになるものと心得ております。なにとぞ私にお声をおかけにならないよう、出来ましたら私を見るのもお控えくださるようお願い申し上げます。昨晚、何事かが出来いたしましたして、その影響を避けることは大変に難しゅうございます。双方にとつて望ましからざる事態を避けるべく、無礼を承知でかように申し上げている次第です。

こころよりの感謝をこめて。

アヴリル・アリンソン 拝」

ジョン・オーステンは座ったまま手紙を凝視していた。自分の死刑宣告でも眺めているかのようにだった。二度と

彼女に会えない？ 今朝会えなかっただけでこれほどひどい気分だというのに。ウェイターがメニューを差し出しているのも目に入らず、ただ座して虚空を見つめていたが、あわてて立ち上がり、サルーンを飛び出した。この情報を手入したいま、食事している場合ではなかった。

二度と会えない？ 冗談じゃない、彼女なしでは生きていけない。毎日、一日中、会っていたい。彼女がいないなんて耐えられない。突如、オーステンの脚がとまった。

「ばかか、おまえは！」と大声で叫んでしまった。「あの子に恋してるのか！」

となりの椅子に座っていた婦人が、もしかして私のことかしらと怪訝な顔で見上げてきた。しかしオーステンは自分の苦悶に心をとられ他のなにも気にならなかった。船べりの手すりにひじをつき、手で顔を覆ってしまった。いい年をした四十男が二十歳の青年のように恋をしている。しかも相手は自分の娘であってもおかしくないくらい若い。かれに出来ることといえば、結婚してくれとプロポーズすることだけだった。しかし拒絶されたら？ 思えばこの航海中、自分は何にをしてきた？ 彼女個人に興味はない、色恋沙汰ではないから勘ぐるなど必死で宣言してきたに等しかったではないか。初めて出会ったときに彼女が示してくれた親愛の情を、孤高を気取って無にしてきた自分を思うと、悲鳴をあげたくなるオーステンであった。

船はついにニューヨーク港に入ったが、まだアヴリルの姿は見えなかった。自分の客室に身を隠しているのだから。しかしオーステンにもひとつだけ希望が残されていた。彼女もいずれは出てきて通関手続きをしなければならぬ。そして二人の苗字がともにAで始まることを思い出し、うれしくなった。通関の際は手荷物がアルファベットの順に並べられるため、いやでも顔を会わせることになるのだ。彼女がミスだったり、自分がトンブキンスだったりしたら、波止場の両端に分かれてそれっきりだったかもしれない。ともあれもう一度顔を見る機会はあるわけで、オーステンは心躍らせながら待っていた。

巨大な客船がゆっくりと着岸するや、オーステンはスーツケースを手を舷側階段を駆け下りた。Aと記された区画にはすでに起重機によって船荷が降ろされていた。アリンソンというラベルが貼られた大きなトラックがあった。かれはその横に立つことにした。遅かれ早かれ所有者が鍵を手に姿を見せざるを得ないとわかっていたからである。茶色のファーに身を包んだほっそりとした姿が波止場に現れ、近づいてきた。オーステンは衝動を抑え切れず、足早に出迎えに走った。あなたのせいで、と非難するような瞳がかれを見上げた。

「言っただでしょ！ ああ、会わないでって言っておいたでしょ！」と女。「もう別れられなくなってしまっ」

「別れたくなんかない」と男が返した。「ぼくと一緒にいればいい。追い払おうとしても無駄だよ、どこにも行かないから。アヴリル、ぼくと結婚してくれ」

女はきりつと見返した。「いやよ」と言った。「絶対にいや。これはただの狂った恋なのよ。あたしを通じてあなたに流れこみ、また戻ってきたあの力が引き起こした悪戯にすぎない。召喚作業にはつきものなの。力が流れ込むための女性がいて、それを戻すための男性がいる。力は二人のオーラを結びつけ、絆を作ってしまう。だからあたしはあの嫌らしい連中が笛を手にいれるのが怖かった・・・あんなのにいいようにされたくなかったから」

「ということは、つまり　：きみも絆を感じているんだね？」

アヴリルは昂然と姿勢を正した。「あたしは感情に押し流されるほど愚かではないのよ」と彼女。「普通の状態ならあなたはあたしなど気にもとめないでしょう。それはこちらも十二分に承知しているわ。あたしだって、魔法にかかってあたしを愛してしまった男と結婚する気にはならない」

「本気でそう思ってるのか？」

「本気もなにも、あなたが必死でわからせてくれたじゃないの。あんな不愉快な一週間は生まれて初めてだったわ」

「じゃあ本当のところを説明させてくれ。きみを好きになりすぎるのが怖かっただけなんだ。ぼくなんか相手にならないとわかっていた。きみの親であつてもおかしくない歳だ。だから、傷つくのが怖かった。でもいまはどうでもいい。アヴリル、話を聞いてくれ」

しかし彼女は踵をかえし、歩き去ろうとしている。

「アヴリル、待ってくれ！　こんな別れ方はないだろう。ぼくたちは結ばれたんだ。愛してしまった以上、きつかけなんかどうだっていいじゃないか」

しかし彼女は歩き続けた。手遅れにならないうちに、決心が鈍らないうちに、荷物を捨ててでも愛と男から逃げようとしていた。男は呆然とたたずみ、女がこだまする靴音が残しつつ巨大な倉庫の影のなかに消えていくさまを眺めていた。男と女のあいだに到来しうる最高のものをふたりは経験した。それは霊の契りだった。女はそれをいま捨てようとしている。男が自分の美貌になびかず、誇りを傷つけられたという理由で。彼女もまた絆を認識している。それは間違いない、と男は感じた。唇が拒絶の言葉を語ろうとも、瞳がそれを告げていた。このままいかせるべきか、つかまえるべきか。かれは胸ポケットに手をやり、碧玉の笛を取り出した。すべてのいざこざの原因となったあの七つの音栓を持つ笛だ。ならば、この笛にも相応の償いをしてもらおうではないか。笛を唇にあてる。接岸上陸の喧騒のなか、溪流のせせらぎが奏でられる。あわただしい乗客たちの傍ら、気づかれることなく碧玉の笛を奏でる。七つの音栓から奇妙なメロデーが流れていく。すると油で汚れたドックの海水からも応答のきざしが感じられる。汚泥の下に潜む純粹可憐な魂がタツチされて目を覚ましたかのようにだった。

しかし男の視線ははるか向こう側にある巨大倉庫の影のなかに向けられていた。影のなかから新たな影が現れ、こちらに歩いてくるだろうか？　かれは埠頭の腐った木の床をゆつくりと歩きながら、アルカディアの牧神のよう

に笛を吹いた。陰鬱な場所が流水の音に浸されていく。

そのとき求めるものを見た。影のなかから女がやってくる。大洋の波のように一定のリズムを刻みつつ素早く歩いてくる。しかし前のときとは違い、今度は両目をしっかりと見開き、ほほえんでいる。男は女の手をとった。触れると同時にあの奇妙な振動が伝わってきた。ふたたび構築された絆がふたりの心をさらに近づける。男は女の瞳を覗き込み、ふたりがひとつになったことを知った。

(終)

； 江口之隆 訳